
とある双子の邪神様 (Evil God)

双子の邪神様

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある双子の邪神様 (Evil God)

【Nコード】

N9599S

【作者名】

双子の邪神様

【あらすじ】

円形の壁に囲まれ、人口230万人の内、8割が学生という学園都市。

そこは、外側の世界より10年以上進んだ科学技術を持ち、能力開発により超能力が当たり前に存在する未来都市でもある。

レベルアップ
幻想御手事件が解決したのも束の間、今度はそれを模倣したかのよう
な魔導具と呼ばれる謎の道具が学園都市に出回りはじめる。

それと時を同じくして、『秘密の地下ステーション』と呼ばれる新

たな都市伝説が広まり始めた。
マジックツール
魔導具は都市伝説が示す通りの異世界より持ち込まれた道具なのか、それともただの模倣犯なのか・・・

この小説（駄文）は、とある科学の超電磁砲の世界に、オリジナル小説『暗黒武装鉄道結社シユバルツァークロイツ』の世界をドッキングさせた自己満足作品です。

原作のストーリーからズレる・・・それどころか明後日の方向に突っ走る可能性や、原作には登場しない人物や機関、技術などのオリジナル要素が多数登場します。

「原作を汚すなゴルア#」という人にはオススメ出来ない・・・それでも、問題ないという宇宙より広い心を持った方のみ御覧ください。

オリジナル小説

暗黒武装鉄道結社シユバルツァークロイツ

1 反旗の章

<http://ncode.syosetu.com/n0819n/>

2 辺境の章

<http://ncode.syosetu.com/n6844o/>

プロローグ（前書き）

マジックナビゲーションだと響きが悪かったので、マジックツールに変更。

あと、少し暗黒武装鉄道結社の介入理由を変更しました。（狂信的な人達にヌツ殺されないか心配な今日この頃・・・）

ブローグ

窓も扉も無いビルの中、二人の声が響く。

「魔導具を能力者仕様に？」

出来なくは無いと思うよ、ぼく達が使用してる新世代魔法と根本的な原理は一緒みたいだしね・・・」

「ならば話は早い、君達に技術協力を依頼したいのだが、どうだろうか？」

「既存の技術だし、その辺は問題ないけど、ぼく達は営利企業、何かしら見返りがないとね」

「分かっている、君達が申請していた、地下ステーションの件は好きにしてもらって構わない。」

「それは助かる、あとついでになんだけど、うちの双子達が学園都市に行きたいと駄々をこねて困ってるんだよね」

「その二人の研究を交換条件として貰えるならば留学を特例として認めるのもやぶさかではないが・・・」

「傷付けない範囲なら好きにやって、ただ絶対に怒らせないように細心の注意を払うこと、学園都市いや、このブレーン（並行世界）を消滅させたくなければ」

対面している一人は、緑色の手術衣を着た、赤い液体に満たされた巨大な円筒器に逆さまで浸かっている男にも 女にも、子供にも

老人にも、聖人にも囚人にも見える人間で、外の世界より10年以上進んだ技術を持ち、人口の8割が学生という「学園都市」と呼ばれる未来都市の最高権力者である、統括理事長アレイスター・クロウリー。

もう一人は、黒を基調とした赤いライン入りの紳士服を着着こなし、右腕にはナチスを連想する暗黒十字が描かれた赤い腕章を着けた14歳位に見える少年で、次元を超えてブレン（並行世界）を結び、物流でそれらを支配しようと企む武装した民間鉄道会社、『暗黒武装鉄道結社シュバルツァークロイツ』の総帥である、フラウ・ラツテ。

「ところで、ローマ正教、イギリス清教、ロシア成教、の動きは？」

「今の所、目立った動きは無い、やはり君達がこの世界に介入する理由は・・・」

「ただの残党狩りですよ、セントノア十字教会勢力のね・・・他は、ばく達暗黒種族の脅威となる存在ならば、全力で叩き潰す、共に歩む可能性のある存在ならば、全力で支援する、それがばく達暗黒武装鉄道結社です。」

暗黒武装鉄道結社シュバルツァークロイツは、次元を超えて十字教と戦い「暗黒種族」と呼ばれる、十字教で邪悪な存在とされた種族の連合体の生存権を守る盾であり、十字教とはいわば敵対する組織である。

故に、学園都市のあるのこの世界の近接次元一帯を支配していた、セントノア十字教会の勢力を数十年前に彼らは圧倒的な軍事力で駆逐した。

近年起こっている、信仰心の減退と科学サイドの対等はこれが原因であるとも言われている。

しかし、数カ月前から、この世界に残っている十字教の各宗派がセントノア十字教会側の工作員と接触している事をシュバルツァークロイツ防衛局情報部の情報収集活動により察知、反攻作戦の兆候である可能性を考慮し、この世界への介入を開始したのだ。

「反攻作戦が行われた場合、どこまでやるつもりなのかが気になる所だがね・・・」

「バチカン、イギリス、ロシア・・・いやヨーロッパ全土を焦土にしても良いと考えてる。」

アレイスターの問いにフラウは、表情ひとつ変えずに答えた。

現段階では学園都市を支援する形での限られた介入だが、いざとなれば各地に散らばる13の列車総隊（列車総隊1つで1つの軍隊規模）を総動員した武力介入を行っても良いとフラウは考えている。しかし、「ナショナル・レール」各社を初め、シュバルツァークロイツの亜空間軌道に恒常的に車輛の乗り入れを行い大きな利益を上げている鉄道会社が多数存在するイギリスを拠点とするイギリス清教は、そう迂闊に動く事は無いだろう。

なぜなら、下手にシュバルツァークロイツと事を構えれば、シュバルツァークロイツの飼い犬と化した各鉄道会社が一斉ストライキを偽装した、物流網及び交通網破壊作戦でイギリス国内が大混乱に陥るからである。

ロシア成教もシュバルツァークロイツと密接な関係を持つ国営ロシア鉄道の利権が絡むため、下手をすればスターリン時代の宗教弾圧が再来する可能性があり身動きが取れないだろう。

問題はローマ正教である。

フラウは、憎悪に満ちた顔で拳を強く握る。

彼は憎んでいる、両親を奪った十字教を・・・神の名の元に暗黒種

族を虐殺した十字教を信仰する者達を・・・
そして、暗黒武装鉄道結社シュバルツアークロイツは、彼が唯一絶対の神への復讐を行う為の剣つるぎでもあるのだ。

「神に弓引く復讐の鬼となるか・・・実におもしろい・・・」

「それは違います、ぼくは最低最悪のチキン野郎ですから・・・
だから、怖くて正面から戦うなんてできない・・・だから、戦略を練り人を駒のように操り戦うんです。
ぼくができるのはその程度・・・」

学園都市

「第7学区」

放課後の第7学区・・・

ふれあい広場の「クレープハウスLab1m」
の前には今日も行列ができています。

その近くのベンチには、クレープを食べながら話をする、常盤台中
学の制服を着た少年二人の姿があった。

「はあ・・・」

その一人の茶髪のツインテールの少女がため息を漏らした。

彼女は学園都市の治安を守る風紀委員第177支部に所属するレベル4の能力者、白井しらい 黒子くろこである。

「何ため息ついてんの？」

元氣のない黒子を心配して、茶色のショートヘアーの少女が理由を尋ねる。

彼女は、学園都市に7人しか居ないレベル5の能力者で、『超電磁砲』の異名をもつ御坂 美琴である。

「どうもこうもありませんすわ・・・」

ガツクリと肩を落としながら、事情を話しはじめる黒子。

彼女の話では、幻想御手事件のあと、それを模倣したかのような魔導具と呼ばれる、幻想御手と同様に能力レベルを向上させる謎の道具が出回り、暴れる学生が大量発生し、その対応に追われているとの事だ。

しかも、その魔導具の形状が、ナイフだったり、携帯端末だったりバラバラで容易に見発見することができず、事件発生後に対応するのがやっとというのが現状らしい。

ただ、その魔導具で能力レベルが向上するのはレベル3までらしく、今のところ何とか対応できているようだが、このまま事件発生件数が増えれば、いずれ限界をむかるのは明白である。

そうなる前に、魔導具の制作者を何とか見つけ出し、事件の収拾を図ろうとしているのだが、手掛かりひとつ掴めない状況なのである。

「ふん・・・それなら私手伝おうか？」

「結構ですよ！」

協力を申し出た御坂だったが、黒子は即答でそれを断った。

そして、

「お姉さま、これって面白そうだとか、これならしばらく腕試しの相手に困らないかもだとか、いい暇潰しみつけたわ」だとか、考えていませんですこと？」

と、御坂が考えていそうな事を幾つか羅列してみた。

「うゝ・・・それは・・・」

図星だったのか、御坂は明後日の方向をみている。

「御坂さゝん、白井さゝん」

黒子がお約束のお説教モードに入ろうとしたとき、柵川中学校の制服を着た二人が美琴達の所まで駆け寄ってきた。

黒髪のショートヘアに花飾りを着けているのが、初春ういはる 飾利かざりで、黒子と同じく風紀委員第117支部に所属するレベル1の能力者で、もう一人の黒髪のロングヘアの少女は飾利のクラスメイトで、初春のスカート捲りの常習犯でもある、佐天さてん 涙子なみこである。

「白井さん、探しましたよ。」

「何かわかりましたの初春」

「手掛かりとは言えませんが、佐天さんが、面白い都市伝説を見つけて、それを調べていたら・・・」

初春の説明では、佐天が見つけた都市伝説とは、『秘密の地下ステーション』というもので、学園都市の地下に学園都市と異世界とを繋ぐ鉄道の巨大ターミナルステーションが存在し、そこから異世界

人の手により異世界の道具が持ち込まれ、学園都市でその実験が行われているというものである。

更に飾利がその都市伝説を調べたところ、幾つかの掲示板で魔導具マジックツールが、異世界から持ち込まれた物だという書き込みを発見したという。

「地下ステーション・・・あり得ませんわ!」

当然そんな、銀河鉄道宜しくな話を黒子が信じる筈もなく、瞬時に否定する。

まあ、四方を壁で囲み外からの交通手段をシャットアウトしている学園都市の地下に巨大なターミナルステーションを作るなんて、常識的にあり得ない。

「ええ!?!、面白いじゃないですかぁ・・・」

「面白いとか面白くないとかは、捜査に関係ありませんの!」

佐天が、話に食い付かない黒子に不満げに抗議するが、黒子は捜査には関係ないと言い切る。

「初春も、もう少し冷静におなりなさいな。

学園都市と異世界を結ぶ列車なd・・・いゝっ?!」

初春に小言を言いながら空を見上げた黒子が目を見開き固まった。その目線の先には、上空をうねりながらまるで地球に降り立つ99号の様に移動する赤い光の帯・・・

「どうしたの黒子・・・え・・・UFO?!」

黒子の異変に気付き、空を見上げた御坂も固まった・・・

「実は正解だったり・・・」

「かもですね・・・」

佐天と初春も固まった。

その目線の先で、移動する光の帯は空に溶けるように消えてしまった。

（わ・・・わたくし疲れているだけですの！だからあのような幻覚を・・・）

造語や用語の説明（前書き）

この作品には、暗黒武装鉄道結社シュバルツアークロイツの独自の用語や造語が多数登場します。

作中でも詳しく説明しますが、こちらでも軽く説明します。

ストーリーの進行に併せ・・・気が向いたら更新します。

造語や用語の説明

「暗黒武装鉄道結社シュバルツアークロイツ」

亜空間軌道と呼ばれる平行世界同士を繋ぐ軌道（線路）を使用した巨大な鉄道網を保有する民間鉄道会社。

しかし、民間鉄道会社でありながら、強大な軍事力で武装しそれを背景にした強力な輸送網による物流の独占を行い、各並行世界を^{ブレイク}実質的に支配する国家を超越した組織である。

「亜空間軌道」

亜空間軌道とは、並行世界同士の間が存在する7次元の混沌とした概念の無い亜空間に亜空間シールドマシンにより作られる概念のトンネルの事を指す。

この概念のトンネルにより列車は亜空間の混沌に取り込まれることなく走行する事ができる。

なお、トンネル内には線路は無く、^{エアレールシステム}空中軌道装置を使用し走行する。

^{エアレールシステム}
「空中軌道装置」

亜空間軌道を走行する列車の台車に装備されている空中を走行するための魔力系システムのひとつ。

「滑走軌道」

通常軌道から空中軌道に入線するために必要な速度（時速120km以上）に加速するための長い高速走行用軌道。

列車がここで着軌（着陸）、急加速、急減速を行うため、通常軌道の鋼鉄製のレールより遥かに頑丈なミスリル合金製のレールが使用されている。

銀河鉄道株式会社のカタパルトレール（列車を軌道リングに入線させる急勾配のレール）のようなものであるが、列車がエアレールシ

ステムで自立走行するので勾配は必用ない（むしろ加速力が低下するので不用である）が、高層建造物との衝突を避けるために、高層建造物より高い高度まで上らせ離軌（離陸）させるものが主流である。

しかし、学園都市地下ターミナルステーションの滑走路軌道は秘匿製確保の観点から地下に作られ地上のトンネル入口から入線するという、一歩間違えば大惨事となる難所である。

「魔導機関」

液体燃料マナルを使用した機関を指す。

その特徴は、燃焼により発生する熱や運動エネルギーとマナルが燃焼時に発生させる膨大な魔力が取り出せるてんである。

この機関のお陰で暗黒武装鉄道結社は、魔力系システムと電子／電気系（科学）系システムの双方が高度に発達する事になった。

魔導機関には、魔導蒸気機関、魔導ディーゼル機関、魔導タービン機関がある。

「液体燃料マナル」

暗黒武装鉄道結社シユバルツアークロイツがエネルギーとして使用している、エメラルドグリーンの光りを発する可燃性の液体。

引火点約60～100度、発火点約250～400度で、燃焼時に膨大な魔力と、マナルガスという有毒ガスが放出される。

一旦燃焼が始まると爆発的に燃え、膨大な熱エネルギーと運動エネルギーが得られる。

燃焼後には、マナル粒子が残り、機関内部に付着し、それが固まり魔石化する。

なお魔石は一部の地域では貴重品であり、機関清掃時に出る魔石の欠片や機関内部の廃材は高値で取引さえる。

「魔力系システム」

魔力を利用したシステムで、魔力素子（各種魔石）と魔力の流れを利用した魔力演算装置（科学側のコンピュータに相当）等が存在する。

しかし、ディスベルマジック解除魔法や術式改変等で簡単にその動きを阻害できてしまう弱点がある。

「電子／電気系システム」

列車のモーターや発電機、それを制御する電子機器を指す。当然大出力の電撃を受ければ破損する。

「ハイブリット文明／テクノロジー」

魔法技術と科学技術を組合せ高度に発達した文明を指す。暗黒武装鉄道結社が持つ技術がこれに当たる。

「魔電変換器」

魔力と電力を相互に変換器可能な装置で、魔導機関を搭載した気動車しか走行できない亜空間軌道に魔導機関を搭載できない電車を走行させるために開発された特種装置で、大容量バッテリーとあわせて使用される。

マジックツール

「魔導具」

使用者の脳とリンクして、術式や演算を関数管理して代行する簡単なプログラムを構築する感覚で術式の展開や能力を使用する事ができる外部演算補助装置。

元々は、難解な術式理解しなければ使用出来ない旧世代魔法を簡略化する目的で開発された新世代魔法のための技術（オリジナル小説に登場する亜空間管理局のMGツールや崎守さきもり 神奈かなの超重量級の大剣がこれにあたる）。

その後、学園都市との共同研究で、使用されるシステムが更新され、能力者の能力使用にも対応したが、学園都市側に提供されたシステ

ムはローカルモード（単独で演算を行うローカルモードと複数の魔導具がお互いに余剰能力を都合し合うネットワークモードがある）のみのシステムで、演算能力にも制限がかけられている。（制限を解除した場合、レベル5能力者でも能力がアップする可能性がある。）

なお、『マジックツール』は、学園都市側の呼称であり、暗黒武装鉄道結社ではそのまま『まどうぐ』と呼称する。

「キンダーガルテン号」

双子の邪神、ラズロツトⅡファルとリズロツトⅡファルの移動に使用される超大型（車体長30メートル超えの特種2連6輪台車「実質的に12輪台車」を装備したモンスタートレイン）の重戦闘列車ベースのお召し列車。

戦闘列車の無骨な外観とは裏腹に、居住車両の内装は豪華で、居住性を最優先に作られている。

その高い居住性は、双子がそこで常時寝泊まりしても問題ないほどである。

なお、戦闘列車としての性能も旗車フラッグトレインの最強クラスで、強力な戦闘列車が豪華な客車を牽引している状態になっている。

また、このお召し列車は特別仕様のTCAI（列車制御用人工知能）により完全な無人運行を可能にしている。

「TCAI（列車制御用人工知能）」

臨機応変に状況判断を行い、列車の運行や制御を全自動で行う自立型の人工知能プログラム。

「お召し列車用TCAIシステム・リタⅡオペテラ」

特別列車用に外部デバイスユニット（TCAI制御型魔導人形）を装備したVIP対応型TCAIシステム、オペテラシリーズの製造番号04（4号）で、シリーズ内で一番感情豊（腹黒い）が、ラズ

ロットとリズロットのおバカ2連星の振り回される日々を送った当然の結果といえる。

一応、双子の教育係も担っている。
事ある毎に、デザート抜きという最終兵器を使用するため、双子から恐れられている？

「プツペディナシリーズ」

列車の乗務員としての業務を行う自立型の魔導人形で、キンダーガルテン号に乗務しているプツペディナ達は、通常型とは異なり、個性豊かな特別仕様である。

TCAIがダウンした場合は彼等がマニュアルで列車を動かす。

「双子の邪神様」

ラズロットⅡファルとリズロットⅡファルという名前の、万物の法則を支配する双子の暗黒神。

一応、暗黒神の中でも上位に位置付けられる上位暗黒神に分類される。

二人は暗黒武装鉄道結社の前身である暗黒鉄道結社設立時の資金や資材、技術等の必要な物を謎のルートで調達し支援した事と、その幼いアンティークドールの様な外見から、暗黒武装鉄道結社の象徴マスコット的な存在として人気（一部では狂信的な信仰の域に達している）が高い。

一応2000年以上生きているはずなのだが、その精神年齢は外見同様幼い。

一部ではバ神様、馬鹿神様などというありがたくない愛称を貰うほどのおバカな行動が多く、その結果自滅どころか周囲に多大なる（壊滅的な）被害がもたらされる事が珍しくない。

プロローグでフラウが二人を止めなかったのは、しばらく二人を学園都市に押し付け、平和な日々を送りたかったのかもしれない・・・

「原始文字」^{ロウコード}

万物の法則を支配するために双子が生み出した様々な事象を操作できる文字や文字列。

このロウコード^{ロウコード}を組み合わせたものが術式関数の原型となり、旧世代魔法と新世代魔法のベースとなっている。

他にも、万物の法則を支配する文字や文字列は存在するが、万物の法則を完全に網羅し支配できるものはこの原始文字^{ロウコード}が初めてであるが、その膨大かつ複雑怪奇な理論は双子しか理解できないものである。

この、原始文字^{ロウコード}を直接展開させ力行使するのが暗黒魔法で、原始文字^{ロウコード}を完全に理解している双子のみが使用できる万能魔法となっている。

現在、この原始文字^{ロウコード}の研究をシュバルツァークロイツが総力を挙げて行っているが、いまだに足掛かりすら得られていない状況である。

列車紹介（キンダーガルテン号）（前書き）

作中で多々登場することになるキンダーガルテン号の紹介です。

ここで、デンライナーと言うか999号と言うか、はたまたアイアンベルガーと言うか、世代で別れそうですね。

列車紹介（キンダーガルテン号）

キンダーガルテン号

> i 1 8 8 5 2 — 1 9 9 8 <

「所属列車総隊」

第00列車総隊（運行監理局暗黒神殿監理部）

「所属車輛区」

シュバルトメイジシュタット車輛区

「編成種別」

旗車型重戦闘列車（広域レーダー及び戦略兵装増設） + 対空兵器装備型重装甲客車増結

「主動力」

魔導タービン機関

「補助動力」

魔導ディーゼル機関及び蓄電池

「駆動方式」

高速走行時は魔導タービン機関によるターボシャフト駆動。

中低速走行時は魔導タービン機関駆動の発電機の電力による、モーター駆動。

静音走行時は蓄電池の電力によるモーター駆動。（充電は魔導ディーゼル機関で駆動する発電機が回生ブレーキによる発電により行われる）

「車体材質」

ミスリル合金とアダマンケヴラーの複合装甲素材

「列車編成」

1号車

全長：35M 全高：4.5M 全幅：3.4M

前台車：4 - 6 - 6 連結個別可動式16輪MT台車

後台車：6 - 6 連結個別可動式12輪MT台車

車体形状：ハイデツキ

色彩：ダークグレーと赤のツートンに白黒帯

貫通配置：

垂直発射型VLS20基、シュバルツアーブリッツ砲

床下配置：

魔導タービン1号機、発電機、各種制御機器等（燃料タンク含む）

F配置：運転台及びメインフレーム

2 - 3号車

全長：3.5 M 全高：4.5 M 全幅：3.4 M

両台車：6 - 6 連結個別可動式12輪MT台車

車体形状：ハイデツキ

色彩：ダークグレーと赤のツートンに白黒帯

貫通配置：垂直発射型VLS40基

床下配置：

魔導タービン2 - 3号機、発電機、各種制御機器等（燃料タンク、

蓄電池含む）

F配置：メインフレーム

4 - 5号車

全長：3.5 M 全高：5.0 M 全幅：3.4 M

両台車：6 - 6 連結個別可動式12輪MT台車

車体形状：ハイデツキ

色彩：ダークグレーと赤のツートンに白黒帯

床下配置：

魔導タービン4 - 5号機、発電機、各種制御機器等（燃料タンク、

蓄電池含む）

F配置：メインフレーム

屋上配置：

30 cm 2 連装魔導メーサーカノン砲2基

側面配置：

30cm 2連装魔導メーサーカノン砲各1基
6号車

全長：3.5M 全高：5.5M 全幅：3.4M
両台車：6 - 6 連結個別可動式12輪MT台車
車体形状：ハイデツキ

色彩：ダークグレーと赤のツートンに白黒帯
床下配置：

魔導タービン6号機、発電機、各種制御機器等（燃料タンク、蓄電池含む）

F配置：指令室
屋上配置：

30cm 2連装魔導メーサーカノン砲1基、広域レーダー（皿型）
側面配置：

30cm 2連装魔導メーサーカノン砲各1基

7 - 9号車

全長：3.5M 全高：4.5M 全幅：3.4M

両台車：6 - 6 連結個別可動式12輪MT台車

車体形状：ハイデツキ

色彩：ダークグレーと赤のツートンに白黒帯

床下配置：

魔導補助ディーゼル機関、発電機、各種制御機器等（燃料タンク、蓄電池含む）

20mm魔導バルカン砲20基

F配置：来客用個室6部屋

屋上配置：

20mm魔導バルカン砲40基

10 - 11号車

全長：3.5M 全高：4.5M 全幅：3.4M

両台車：6 - 6 連結個別可動式12輪MT台車

車体形状：ハイデツキ

色彩：ダークグレーと赤のツートンに白黒帯
床下配置：

各種制御機器等（蓄電池含む）

20 m 魔導バルカン砲 20 基

貫通配置：

大型給水タンク（給水設備含む）

屋上配置

20 m 魔導バルカン砲 40 基

12号車

全長：35 M 全高：4.5 M 全幅：3.4 M

両台車：6 - 6 連結個別可動式 12 輪 T 台車

車体形状：ダブルデッキ

色彩：ダークグレーと赤のツートンに白黒帯

1 F 配置：

調理設備、貯蔵庫、冷蔵庫

2 F 配置

食堂、カフェテリア

13号車

全長：35 M 全高：4.5 M 全幅：3.4 M

両台車：6 - 6 連結個別可動式 12 輪 T 台車

車体形状：ダブルデッキ

色彩：ダークグレーと赤のツートンに白黒帯

2 F 配置：

ラズロット、リズロットの専用部屋、展望室、推進運転用運転台

1 F 配置

大展望浴場（外側からは見えない）、サロン

「概要」

双子の邪神様（ラズロット、リズロット）の移送手段と居住場所として使用されている、最強クラスの戦闘能力と最高ランクの居住性を併せ持つお召し列車。

しかし、大出力の魔導タービン機関の騒音は公害級であるため、市街等を走行する場合は、補助魔導ディーゼル機関と蓄電池を使用している。

この列車の名前、キンダーガルテン（幼稚園）の由来は、未だ精神年齢の幼い双子達を教育する移動幼稚園という意味らしい。

そのため、ヘッドマークも幼稚園帽子デフォルメされた2枚の天使の羽という無骨な外観とかけ離れた可愛らしい物になっている。

また、登場以来幾度となく車輛の改装、入換えによる更新が繰り返された結果、既に原型をとどめていない魔改装列車でもある。

列車紹介（ヴェファリア？号）（前書き）

第3列車総隊司令官がのるレトロな軽戦闘列車です。

ビッグワン（銀河鉄道物語）とか言わないで（TOT）

パシナ型蒸気機関車は個人的にお気に入りです。

鉄道関係の用語はWikipediaで調べると詳しく載ってます♪

列車紹介（ヴェファリア？号）

ヴェファリア？号

「所属列車総隊」

第03列車総隊（防衛局ブリザッド管区）

「所属車輦区」

ブリザッド車輦区

「編成種別」

旗車型軽戦闘牽引列車（ダブルテンダー式4 - 8 - 8 - 4ビッグロ・マレー型魔導蒸気機関車牽引）

「主動力」

魔導蒸気機関車

「駆動方式」

機関車による牽引

「車体材質」

ハニカム構造型ミスリル合金装甲

「列車編成」

ビッグロ型蒸気機関車

全長：4.2 M 全高：4.0 M 全幅：3.4 M

車輪配置：4 - 8 - 8 - 4（動力ユニット2基ビッグボーイ型）

動輪直径：1500 mm

車体形状：流線型

色彩：黒地に赤帯

テンダー車：マナルタンク型2輦

制御方式：遠隔TC AI 制御／マニュアル操作

1 - 3号車

全長：2.5 M 全高：4.0 M 全幅：3.4 M

両台車：4輪T台車

車体形状：シングルデッキ

色彩：黒地に赤帯

床下配置：

各種制御機器等

F配置：メインフレーム、3分割収納型シユバルツァーブリッツ砲
屋上配置：

15mm4連装魔導パルスレーザ左右20着

4 - 6号車

全長：5M 全高：5・0M 全幅：3・4M

車輪配置：8輪固定

車体形状：シングルデッキ

色彩：黒地に赤帯

床下配置：

魔導ディーゼル発電機、各種制御機器等（燃料タンク含む）

F配置：電源装置

屋上配置：

25cm 3連装魔導シヨックカノン砲1基

側面配置：

25cm 3連装魔導シヨックカノン砲各1基

7号車

全長：25M 全高：5・0M 全幅：3・4M

両台車：4輪T台車

車体形状：シングルデッキ

色彩：黒地に赤帯

床下配置：

各種制御機器等

F配置：指令室

屋上配置：

広域搜索レーダ

側面配置：

20連装多目的ランチャー各4基

8-13号車

全長：25M 全高：4.0M 全幅：3.4M

両台車：4輪T台車

車体形状：シングルデッキ

色彩：黒地に赤帯

床下配置：15mm4連装魔導パルスレーザ砲15基

F配置：乗務員用室20室

屋上配置：

15mm 4連装魔導パルスレーザ砲15基

14号車

全長：25M 全高：4.0M 全幅：3.4M

両台車：4輪T台車

車体形状：シングルデッキ

色彩：黒地に赤帯

床下配置：15mm4連装魔導パルスレーザ砲15基

F配置：士官用個室4室、展望室付き列車長室1室

屋上配置：

15mm 4連装魔導パルスレーザ砲15基

「概要」

第3列車総隊司令官のダークキッド元帥を乗せ、第3列車総隊のフラッグトレイン

旗車を務めるレトロな外観を持つ軽戦闘列車。

武装と装甲を絞り軽量化した車体を協力的なパワーを持つビグロ・マレー型魔導蒸気機関車（満州鉄道のパシフィック型の蒸気機関車、

パシナ型蒸気機関車を大型化したビッグボーイ型のモンスター機関車）に牽引させる事で、高い機動性を確保している。

なお、ブリザッド車両区には予備のビッグロ・マレー型魔導蒸気機関車があと2基存在し、3重連の編成で運行する時もある。

3重連編成時は、上昇能力と加速力が上がるが、当然消費燃料は3倍になるので燃料効率の観点から3重連編成は最小限にしているようだ。

最近では、学園都市地下ターミナルステーションとロンドン・キングスクロス駅を多数の戦闘列車群を引き連れ頻繁に行き来しており、ナショナルレールを中心としたイギリス鉄道各社と連携しイギリス清教の封じ込め作戦を展開している事が予想される。

ちなみに、ロンドン・キングスクロス駅に入場する際は、必ず9と3 / 4 番線を使用する。

オリジナルキャラクター紹介（前書き）

暗黒武装鉄道結社シユバルツアークロイツ側のキャラクター紹介です。

個性派といか変態揃いです・・・

オリジナルキャラクター紹介

オリキャラ紹介

フラウ＝ラツテ

「種族」悪魔と人間のハーフ

「性別」男（男の娘）

「髪」肩まである金系の様に美しい髪

「瞳」血の様な赤

「肌」女性のような色白の肌

「服装」紳士服に暗黒十字の赤い腕章

「年齢」120歳（外見は12歳）

「能力」次元移動、旧世代魔法

「紹介」

暗黒武装鉄道結社シュバルツァークロイツを率いる総帥で、勝つためには手段を選ばない冷酷残忍な戦略家。

しかし、それは永きに渡り虐げられてきた、悪魔を中心とした暗黒種族が平和に暮らせる未来を心から願うが故の行動である。

暗黒種族全が幸せに暮らせるならば、いくら自分の手が血で汚れようと、多くの者がその犠牲になろうと一向に構わないと考えている。彼曰く、「この世界は残念ながら全ての者が幸せになれる様には出来ていない。だが、より多くを幸せに導く事は出来るかもしれない。」とのことだ。

しかし、冷酷だが理想論を語らない彼は、暗黒種族内から絶大な支持を得ている。

ラズロット＝ファル

「種族」上位暗黒神（新世代神）

「性別」女（幼女）

「髪」薄茶色の片方を三編みにしたボブ

「瞳」右目が深紅で左目が薄紅

「肌」青白く、目の周りや脣が黒

「服装」

フリフリのゴスロリ服に大きな帽子／袖の長い常盤台中学の制服（冬服は異様に袖が長い）に幼稚園帽子の様な黄色い大きな帽子。

「年齢」2000歳以上（外見は8歳）

「能力」

次元移動、マインドリンク精神連接、魔法全般（旧世代魔法・暗黒魔法、精霊魔法、

ete）、魔力回路構築付与、法則改変、翼による飛行（コウモリのような翼で必用な時に出現する。）

「紹介」

片割れのリズロットといつも一緒に行動する双子の邪神（暗黒神）で、魔法大好きな頭脳派・・・のはずなのだが何故か幼稚でお馬鹿な行動が多く、語尾に「なのです。」を付ける変な喋り方をする。

弱点は、純粹な雨水（一度地面に落ちれば汚れて安全になるらしい）

、直射日光（日光対策にゴスロリ調の日傘を持ち歩いている）、2

0度以上の気温（夏バテするらしい）、トラウマになっっている注射器の4つ。

カルーアをロックで飲むのが大好きで、他の人にも勧めるがそれに付き合わされた人は大抵悶絶し新たなトラウマが刻まれることになる。

好きな遊びは、「惑星でビリヤード」だが、リタとのお約束第26条で禁止中らしい

リズロット＝ファル

「種族」上位暗黒神（新世代神）

「性別」女（幼女）

「髪」薄茶色の片方を三編みにしたボブ

「瞳」右目が薄紅で左目が深紅

「肌」青白く、目の周りや脣が黒

「服装」

フリフリのゴスロリ服に大きな帽子／袖の長い常盤台中学の制服（冬服は異様に袖が長い）に幼稚園帽子の様な黄色い大きな帽子

「年齢」2000歳以上（外見は8歳）

「能力」

次元移動、マインドリンク精神連接、物質創造、強化付与（身体能力強化、魔力属性付与）、法則改変、翼による飛行（コウモリの様な翼で必用な時に出現する。）

「紹介」

片割れのラズロットといつも一緒に行動する双子の邪神（暗黒神）でラズロットとは反対に力自慢の接近戦闘バカで、物質創造と魔力属性付与で作り出した鬼性能の武器を振り回す。

ラズロット同様、幼稚でお馬鹿な行動が多く、語尾に「なのだ」を付ける変な喋り方をする。

弱点は、純粋な雨水（一度地面に落ちれば汚れて安全になるらしい）、直射日光（日光対策にゴスロリ調の日傘を持ち歩いている）、20度以上の気温（夏バテするらしい）、トラウマになっっている注射器の4つ。

カルーアをロックで飲むのが大好きで、他の人にも勧めるがそれに付き合わされた人は大抵悶絶し新たなトラウマが刻まれることになる。

好きな遊びは、「（巨大）隕石でダーツ」だが、リタとのお約束第32条で禁止中らしい。

サラールコット

「種族」人間（魔力で老化停止）

「性別」女

「髪」艶やかな黒髪のショートヘア

「瞳」黒

「肌」色白

「服装」

ミニスカートのスーツか赤いシュバルツァークロイツの制服

「年齢」35歳（外見は24歳）

「能力」魔法（神聖魔法、旧世代魔法）、剣技

「紹介」

暗黒武装鉄道結社シュバルツァークロイツの戦闘機関、防衛局のトップ総元帥で、元は十字教会（オリジナル小説の方）側の聖者だったが、現在ではフラウ総帥に狂う変態腐女に成り下がった、史上最狂のシヨタコン女。

部屋壁にフラウの写真（盗撮）を一面に張り、性的に興奮するは、何とかフラウに女装をさせようと怪しげな計画を考えるはと筋金入りの変態ではあるが、フラウの補佐役としては完璧である。（フラウの弱点を全て把握し、それをカバーし、狂愛故に裏切る心配はない）

ちなみに、シュバルツァークロイツが変態の巣窟（魔窟）と呼ばれる理由は彼女を筆頭とした元帥達が揃いも揃って変態ばかりだからである。（ワーグ元帥、^{サディスト}ポール元帥（爆裂狂）、ダーク元帥（フェミ・ナルシス狂）、ヴェネ元帥（ロリ＋同性愛）・・・まともな人材が皆無）

リタ・オプテラ

「種族」T C A I （列車制御用人工知能）

「性別」女性型

「髪」銀色のショートヘア（外部）

「瞳」赤く光るカメラアイ（外部）

「肌」色白だが、間接の継ぎ目や廃棄孔がある。

「服装」露出の多い黒いドレス

「年齢」運用開始から12年（外見は16歳）

「外部デバイス能力」列車管理全般、各種武器内蔵、武器転送（列車連携）、各種センサー類（耳の部分）

「紹介」

双子の邪神達が乗る列車を管理しているTCAI（列車制御用人工知能）で、列車の制御から運行管理、それ以外にも乗客のお世話などもこなす。

本体は列車の中にあるメインフレームだが、外部デバイスを遠隔操作しての行動もできる。

双子の邪神達の教育担当でもある彼女は、双子達をコントロールできる数少ない存在でもあるが、人工知能の癖に少し黒い・・・

さきもり
崎守 神奈

「種族」人間

「性別」女

「髪」後ろを三編みに結んだ黒髪のロング

「瞳」黒

「肌」不健康さ全開の色白

「服装」

黒縁メガネにシワシワの赤い乗務員服で右耳に剣の形をしたイヤリング

「年齢」27歳

「能力」新世代魔法、魔剣「ゾディーク」（双子の合作）

「紹介」

科学の発達した世界で暮らす人付き合いが苦手で要領も悪い、魔女に憧れるオカルトマニアだったが、双子に出会いその秘められた規格外の魔力を見抜かれ、魔剣「ゾディーク」を渡され、魔剣「ゾディーク」（禍々しい赤いオーラを纏った刀身5メートル、幅90センチの斬馬刀級の両刃の漆黒の大剣）を規格外の魔力で強化された肉体にものを言わせ振り回す災害魔法剣士となった。

なお、要領の悪さは相変わらずで、魔剣「ゾディーク」に魔力制御をしてもらわなければ魔法が上手く使えない。

普段は部屋に引き込もって魔導書を読んだり怪しげな儀式を行っていて、ご飯の時と、誘われた時以外は外に出ない。

服はリタが言わなければ何日も着替えないし、髪の手入れもリタがしなければそのままというインドアダメ人間を極めている。（美人なのだが・・・）

ラストイー＝ノワル

「種族」悪魔

「性別」女

「髪」淡いピンク色のツインテール

「瞳」淡いピンク

「肌」白の肌

「服装」

紺色の金の刺繍で控えめに装飾されたマント付きのローブ

「年齢」150歳（外見は15歳）

「能力」魔獣制御、ルーン式原始魔法

「紹介」

アーシェリアという世界にある魔族の王国ノワルニアの第1王女（オリジナル小説の方で現在進行中のお話のキャラ）で、国の事は妹のリステイーに押し付け・・・任せて外の世界を勉強するために双子達と行動を共にしている。

熱くなると周りが見えなくなる猪突猛進タイプで、言動も子供っぽい所がある。

非常に原始的ではあるが、独自の魔法を使いこなす。本人曰く、「最高位の魔法使い」らしいが、術式がショボいとツツコまれブチ切れるのが恒例行事となっている。

ダーク＝キッド

「種族」夢魔

「性別」男

「髪」白髪

「瞳」蒼い瞳

「肌」白の肌

「服装」漆黒のタキシードとマントにシルクハットに身を包み、怪人マスクで素顔を隠した怪盗の様な姿

「年齢」不明（外見は20 - 26位）

「能力」旧世代魔法、魔力カード

「紹介」

第3列車総隊司令官を勤める夢魔の男。

女性に対しては紳士的で、女性を守るべき最重要対象と考えるイカレフェミニストで、女性を前に口説かないのは失礼に当たると普通に思っている勘違い男いや、変態紳士である。

しかし、彼が変態紳士行動をとる度に、副司令官兼専属メイドのローザ・マリエンヌ中将のどさくさ紛れの強烈な一撃を食らっているが、一向に改善する気配は無い、いやむしろ悪化している。

あと彼は、危機的な状況の女性を検知するリーダーを持っているとは思えないほどの確に、ピンチの女性の元に駆けつけそれを助ける事を趣味としている。

ローザ・マリエンヌ

「種族」悪魔と人間のハーフ

「性別」女

「髪」栗色の長い三つ編み

「瞳」栗色

「肌」黄色色白

「服装」メイド服の様な第3列車総隊女性用制服に金の片眼鏡、両太股に拳銃用ホルスター

「年齢」 18歳

「能力」 魔導銃技（新世代魔法派生）、足技中心の格闘術

「紹介」

ダークキッド元帥を痛元帥閣下と呼ぶ毒舌少女で、第3列車総隊司令官付の副司令官兼専属メイドである。

なお彼女の毒舌攻撃はダーク元帥を愛する彼女なりの愛情表現であり、きらっている訳ではない。

その証拠に、ダーク元帥が他の女性を口説いた瞬間、隣に控えている彼女がたまたま持っていたフライパンが不幸な事故（絶対にわざとだが）で彼の顔面に直撃したり、銃をうっかり暴発（何故か彼の足元に弾が集まる）させてしまったり、バランスを崩し（綺麗な体重移動で）見事なハイキックを彼のコメカミにめり込ませたりする。

第1話 「邪神降臨」 (前書き)

ようやく第1話を公開できました。

書いてて、とあるシリーズらしくない違和感を感じまくりです。

無駄に多い鉄分とか、ツツコミ所満載ですが、読んで頂ければ幸いです。

第1話 「邪神降臨」

学園都市上空

エアレール

「空中軌道区間」

ゴオオオ、という豪快な走行音を響かせ、亜空間軌道から学園都市上空の空中軌道区間に入線する巨大な列車があった。

1 輦の全長は35メートルと新幹線の車体の全長21メートルと比較してもあり得ない程の巨体。

更にその巨体は、ダークグレーと赤のツートンカラーに白黒の帯が塗装された分厚い装甲板に覆われ、それを支える台車は12輪と通常の4輪の台車を遥かに越える車輪数であり、その桁外れの車体重量分散させている。

この巨大な列車は、暗黒武装鉄道結社シュバルツアークロイツのお召し列車「キンダーガルテン号」である。

キンダーガルテン

なぜ幼稚園なのかは追々説明するとして、その列車内では、車内チャイムのオルゴールとともに、車内放送が始まる。

「シュバルトメイジシュタット国際ステーションより87時間の長旅お疲れさまでした。

まもなく学園都市地下ターミナルステーションに到着いたします。到着時刻は現地時刻13時46分48秒を予定、地下ステーションですので、直射日光の危険はありませんが、地上に上がる際は日傘をご持参下さい。

現地の13時現在の気温は35 と20 を大幅に越えておりますので、ご注意下さい。

まもなく、降下及び制動に入ります、揺れる場合がございますので、

座席のシートベルトをお絞め下さい。

キンダーガルテン号TCAエリタ オプテラがご案内させて頂きました。」

車内放送が終わり、車内チャイムのオルゴールが鳴り響く。

その瞬間、車体を覆っていた赤い光が消え失せ、台車のモーターが唸りを上げ、回生ブレーキによる制動を開始する。

学園都市

「地下ターミナルステーション」

「間もなく、21番乗場に特別列車キンダーガルテン号が到着い・
・「21番線、列車到着しますがご乗車になれませんのでご注意ください。」
「業務連絡、タラップ21番に待機。」・・・一般のお客様はご乗車になれませんのでご注意ください。」

特別列車の接近を知らせる駅内放送の合成音声に割り込み、駅員の案内放送と業務連絡の放送が入る。

それに併せ、赤い鼓笛隊の様な制服を着た駅員達が慌ただしく乗降用の小型タラップ車の準備を始める。

このステーションにはホームが存在せず代わりにタラップを使用し乗降を行うのである。

理由はこのまま車輛の整備が行えるのと、利用者が学園都市に派遣された研究者や技術者だけで、一般人が居ないため、安全性を確保する必要性が無いからである。

しばらくすると、場内の併用軌道の様な乗場に、警告ライトを点滅させ、カンカンとけたたましくベルを鳴らしながら、「ゴロゴロ」

という地響きとともに巨体なキンダーガルテン号がゆっくりと入ってきた。

その後、耳障りなブレーキ音と共にキンダーガルテン号は、停車位置にピタリと停車した。

「業務連絡、乗降準備、繰り返す乗降準備」

放送を受けて、待機していた小型タラップ車のタラップが一斉にキンダーガルテン号の扉位置に取り付けられ、「プシュウウ」という鋭いエア音とオルゴールの様なドアチャイムを響かせ、列車の分厚いハッチの様なプラグドアが開かれる。

「学園都市地下ターミナルステーション、学園都市地下ターミナルステーションです。」

お降りの際は足元にご注意下さい。」

ドアが開かれるのと同時に、到着案内の放送が入る。

それと同時に、駅員達が慌ただしく列車最後尾の車輛の入口に接地されたタラップの前に整列した。

次の瞬間、列車がファンファールの様なミュージックホーンを奏で、それに呼応するかのように駅員達が右手を前斜め前方45度、上方45度に突きだし・・・いわゆるナチス式の敬礼の姿勢をとる。

そして、

『ジークシュバルツアー！！（暗黒万歳）ジークシュバルツアー！！（暗黒万歳）』

と、暗黒神とそれに守護され繁栄する暗黒種族を称える言葉を熱唱する。

そんな、割れんばかりの熱唱のなか列車からフリフリのゴスロリ服を着た8歳位に見える双子の少女（幼女と言ったら八つ裂きにされ

ますっ)が姿を現した。

その瞬間、熱唱が歓声に変わる。

薄茶色の片方を三編みにしたボブヘアにシュバルツアークロイツのマーク入りで、これまたフリフリのその頭には不釣り合いな程大きな帽子を被った双子の肌は青白く、目の周りや唇は黒く、まるで不気味なメイクをしている様に見えるが、彼女達は一切化粧はしていない。

更に、アンティークドールの様に整った顔に深紅と薄茶の二人のオッドアイの組合せが、神秘的で危険な雰囲気醸し出しているが・
・そのちょこちょこ歩く可愛らしい仕草と、喜怒哀楽の激しい表情が全てを台無しにしている。

つまり、恐ろしい邪神の筈なのに、可愛らしい姿と仕草のため、威圧感欠片も感じられない。(ドールファンなら思わず抱上げてしまいたくなる可愛さである)

ちなみに、右目が深紅、左目が薄茶なのがラズロツト「ファルで、右目が薄茶、左目が深紅なのがリズロツト」ファルである。

他に二人を見分ける方法は、しゃべり方で、語尾が「・・・なのです。」(。付き)なのがラズロツトで、語尾が「・・・のだ」(。無し)なのがリズロツトである。

いい忘れたが、このお二方、厳密に言うともっと長くなるのですが、2000年以上を生きて来られた非常に位の高い暗黒神様で有らせられ、暗黒種族では双子の邪神様と崇められている、神聖な御神体でもあるのですが、その言動たるや、その外形と同じく、ワガママかつ自分勝手で、更に人の迷惑を省みず、面白いか面白くないかを基準に行動するから困り者、更にイタズラで世界そのものを吹き飛ばしかねないお力を持っておられるから更に性格^{タチ}が悪い。

それはさておき、双子達の後に更に3人が続く。

1人目は、銀髪ショートヘアの少女で、露出の多いドレスの間から見える色白の肌の機械的な継ぎ目や廃棄孔、アンテナの様な

耳そして赤く光るカメラアイの瞳が、彼女が生物で無いことを物語っている。

彼女は、リタ「オプテラ」というTCAI（列車制御用人工知能）で、この身体は遠隔操作された外部デバイスに過ぎず、彼女の本体は列車の中にあるメインフレームにインストールされた完全自立型の人工知能である。

2人目は、赤いシワシワの女性用の乗務員服の黒縁メガネに後ろを三編みで結んだ長い黒髪に黒眼の27歳の女性。

彼女は、もりさき崎守 かな神奈と言う名前で、双子が作った魔剣「ゾディーク」の保有する規格外の魔力を持った人間の魔法剣士である。

魔剣「ゾディーク」は、禍々しい赤いオーラを纏った刀身 5メートル、幅90センチの斬馬刀級の両刃の漆黒の大剣で、そのままでは持ち運ぶのは困難なので、普段はイヤリングに変形させて右耳に着けている。

ちなみに、彼女は規格外の魔力を持っているが、極めて要領が悪くそれを上手く制御できないため、魔剣「ゾディーク」にその制御を手伝ってもらって初めて魔法が使えるダメ魔法剣士なのである。

更に、私生活でも部屋に引き込もって魔導書を読み漁ったり怪しげな儀式を行ったりと筋金入りのオカルトマニアであり、それに加えて洗濯から髪の手入れまで全てリタ任せというパーフェクトダメ人間である。

3人目は、紺色の下地に金糸で控えめに装飾されたマント付きのローブを着た、淡いピンク色のツインテールの髪に同じく淡いピンク色の瞳の色白の15歳位に見える少女。

彼女は、ラスティー「ノワル」という名前で、ノワルニアという悪魔（彼女の世界では魔族）の王国の王族で、シュバルツァークロイツが使用している旧世代魔法、新世代魔法、暗黒魔法とは異なる独自の技術体系を持つルーン式原始魔法（シュバルツァークロイツ側呼

称)を使える魔法使いである。

また、彼女は魔獣の製造にも精通していて、巨大なエイのような自作の甲殻魔獣「ギュオ」を自在に操る。

なお、普段、甲殻魔獣「ギュオ」は彼女の胸ある魔獣の形のブローチになっていて、必用な時に巨大化して彼女を助ける意外と便利な存在だったりする。

「ようこそ、学園都市地下ターミナルステーションへ。
駅長のゲラン＝ハインケルです。」

小柄な駅員服を着た二足歩行のカエルの姿をした水妖魔の駅長、ゲランが5人を出迎え、更に今後の予定を説明する。

「それでは今後の予定ですが、明日は学園都市側からの要請で能力
スキャン試験となります。」

その後、常盤台中学への編入となります。

先週に行って頂いた学力試験の方は極めて優秀な結果だったのと、全く人間ごとき下等生物が偉大なる邪神様を試すとは・・・しかし、その様な無礼極まりない申し出にも関わらずお受けになる寛大さ、このゲラン感銘の極みに・・・」

パアアン

「たわば！」

上層部へのアピールチャンスが少ない辺境配置、ここぞとばかりに双子達を褒め称えるアピール攻勢に出たゲランだったが、功を急ぐ余りに見事に双子達の地雷を踏んでしまっていた。

リズロットの強烈なデコピンにより頭蓋を粉碎されたゲランが脳みそを撒き散らしながら後に吹き飛んだ。

「話長すぎなのだ！」

「神奈さんの悪口は死刑なのです。」

話が長すぎる事と、神奈（人間）の悪口が気に入らなかったようだ。だからと言って、いきなり頭を吹き飛ばす双子達の思考パターンは、どこぞの世紀末世界級の危険さである。

「リズ様、いくら気に入らなかったとはいえ、いきなり壊すのはどうかと思いますよ……」

その様子を見て、双子達の教育を担当をしているリタが注意するが、基準が思いつきリズレている。

いや、彼女が双子達の基準に歩み寄った結果がこれなのである。

「むううう、ちゃんと直すから問題ないのだ！」

悪びれる様子もなくリズロットが不満げな顔をしながら、法則改編で起こった事象を操作し粉碎されたゲランの頭部を元通りにする。

「じゃあ次はラズの番なのです。」

頭部が元通りになったゲランを待っていたのはラズロットの無慈悲な言葉だった。

「お……お許し下さい！お願いします！！」

「取り敢えず、もう一回死んどけなのです。」

必死の形相で許しを乞うゲランに、ラズロットは満面の笑みで死刑宣告を告げた。

その後、必死に逃げるゲランを無邪気に笑いながら追いかけて回すラズロットとのスプラッター映画さながらのリアル鬼ごっこが展開されたのは言うまでも無い。

学園都市

「第7学区」

「さつきから気になってたんだけど、リタは列車の管理で忙しいとして、ラズと神奈は？」

「ラズは、リアル鬼ごっこ継続中で、神奈は、列車内の自室に引きこもり中なのだ。」

「・・・たく、あの陰険と引きこもりめ・・・」

放課後の第7学区の街中を制服姿の学生達に混ざり、散策する日傘をさしたゴスロリ服のリズロットとローブ姿のラストイー。

完全なコスプレ姿の二人は溶け込むどころか、思いっきり目立っている。

特に、アンティークドールの様な格好のリズロットは、写真を撮らせてと頻繁に頼まれ、少しイライラしている。

そんな時に、事件は起きた。

「ようお嬢さん達、俺達暇なんだけど、付き合ってくんない？」

学園都市のお約束、5人の不良学生達に取り囲まれてしまった。

手にはナイフやらスタンガンやらを持っていて、そこからは、魔導

具が放つ独特の魔力の波長が感じられた。

「リズ、気を付けて！」

「新世代魔法使い（ライトマジシャン）なのだ・・・」

当然それに気付いた二人は警戒する。

しかし、不良学生達は、新世代魔法使い（ライトマジシャン）と言う単語に首を傾げる。

「ライトマジシャンだあ？」

「お前ら能力者を知らねえのかよ！」

不良学生達の様子を見たリズロットは、異なる文明で希に起こる、類似の技術の可能性を思い付いた。

彼女は、マインドリンク精神結合を応用した、リードマインド読心で情報を収集する。

どうやらこの都市には、能力開発により人工的に特殊な能力を持った能力者と呼ばれる人間が作られているらしい。

さらに能力者はその能力に応じてランク分けされているようだ。

無能力者（レベル0）

測定不能や効果の薄い力

低能力者（レベル1）

スプーンを曲げる程度の日常では役に立たない力

異能力者（レベル2）

低能力者ほとんど変わらない程度の力

強能力者（レベル3）

日常生活において活用可能で、便利と感じられる力

大能力者（レベル4）

軍隊において戦術的価値を得られる程の力

超能力者（レベル5）

単独で軍隊と戦える程の力

絶対能力者（レベル6）

該当者事例なし、神の領域の力と言われている

因みに相手は全員、無能力者（レベル0）だが、不良グループのリーダーが魔導具マジックツールと呼ばれる物を大量に手に入れ、それを受け取った彼らは、能力を使える様になったようだ。

彼らの能力はそれぞれ、発火系能力、発電系能力、読心系能力、強化系能力、念動系能力らしい。

その他、能力についての情報がある程度引き出したリズロットは、やれやれと首を横に振り、ラスティーにこう告げた。

「新世代魔法の制限付き・・・妨害魔法ディスペルマジックで十分なレベルなのだ。」

「何だところのくそガキがあ！」

リズロットの見下した物言いに腹を立てた、発火能力者の不良学生が炎の塊をラスロットに投げつけた。

しかし、それに合わせてラスティーが虚空に魔力で印サインを描くと、炎の塊は燃え尽きる様に消えてしまった。

「なっ」

「ふざけやがって！食らいやがれ！！」

啞然とする発火系能力者に割り込んだ発電系能力者が手を伸ばし電撃を放とうとする。

しかし、勇ましい彼の台詞とは 裏腹にその手から電撃が放たれる事はなかった。

「悪いけど、私達の周囲に妨害魔法の結果を張らせてもらったわ。」

「なんだと！」

「ちくしょう！力が出せねえ！！」

ラストイーの言葉に、慌てて不良学生達は能力を発動させようとするが、その能力は一切発動しない。

「無駄よ、これは何百年もかけて積み上げられてきた魔法研究の成果、並みの術者じゃ破れないわよ。」

掌に幾つもの印を踊^{ルン}らせながら、ラストイーは得意気に言い放つ。

「さて、リス達に喧嘩を売ったからには、肉片^{ミンチ}になる運命を受け入れるのだ♪」

彼女の能力のひとつ、物質創造で巨大な死神の鎌^{デスサイス}を作り出すと、それを構えゆつくりと歩み寄っていく。

しかも、満面の笑みなのでホラー映画やスプラッター映画のワンシーンとは思えない光景である。

「ルールは簡単なのだ、リズが鬼だから肉片ミンチにされなくなかったら早く逃げるのだ♪」

楽しそうにこれから始める処刑ゲームのルールを説明するリズロットを見て、これは地獄のリアル鬼ごっこコース確定だなと、無残な惨殺死体（変わり果てた姿）になるであろう不良学生達にラストイーは哀れみを込めた視線をおくる。

その先には、無邪気なスプラッター（リズロット）に怯え後ずさる不良学生達・・・そして

「最初に肉片ミンチになるのはお前なのだぁ♪」

少し集団から外れていた、不良学生の一人に向かって跳躍したリズロットは、死神の鎌デスサイスを横に力任せに振り抜く。

「ひいひいひい！」

ドガガガガアアン

獲物ターゲットになった不良学生は、腰を抜かしたがそれが幸いし、その頭の直ぐ上を鎌が後ろのビルの壁をえぐり取りながらすり抜ける。

当然その不良学生は、失禁し白目を剥いた状態で失神して崩れ堕ちる。

「壊れる前に寝ちゃダメなのだ・・・起きるのだ！（ドゴオオオン）起きるのだ！！（ゴスウウウン）」

日曜日に寝ている父親に遊んでとせがむかの様な口調だが、その度に不良学生の顔ギリギリの位置に鎌が振り下ろされ、後ろの壁が無

残にえぐられていく。

その様子を見ている他の不良学生は、恐怖の余り、動けなくなっている。

余談だが、ある動物実験で2匹のネズミを用意し、一方にだけ定期的に電気ショックを与え、どちらのネズミの方がストレスを感じているかを調べるものがあつた。

結果は意外で、電気ショックを与えられたネズミの方は徐々にストレスを感じなくなり、逆にそれを見ているだけのネズミの方がストレスを感じていたのだ。

これは、次は自分がやられるかもしれないという恐怖によるストレスである。

そして、恐怖で動けなくなっている不良学生達の状態は正にこれで現在進行形で心にトラウマを深々と刻み込まれている最中なのである。

「本人は遊んでるだけで悪気が無い分、拷問より質が悪いわね・・・」

「

その様子を見ていたラスティーは、毎度の事ながら呆れている。その時、

「ジャッジメント風紀委員ですの!」

ジャッジメント風紀委員の腕章を着けた、ツインテール・・・そう、白井 黒子が、この現場に駆け付けた。

「殺人未遂、器物損壊の現行犯で拘束させていただきますの。」

・・・To be continued

第1話 「邪神降臨」 (後書き)

今回は、双子達のお家、幼稚園号と、リズロットをメインにしてみました。
キンダーガールテン

いきなり駅長の頭を吹き飛ばす辺りで気付いたかと思いますが、双子達の命に対する価値観はかなりぶっ飛んでいます。(上条さんに鉄拳制裁をされないか心配です、フラグ的な意味で)

第2話 「悪魔の羽」 (前書き)

今回は最初に謝っておきます。

白井 黒子ファンの皆様申し訳ありません。
家の双子がとんでもない事を・・・

第2話 「悪魔の羽」

暗黒鉄道都市「ネオイゲルフェスト」

「暗黒武装鉄道結社本社」

「魔導具実験はダーク元帥の指揮の元に順調に進行中とのことです。」

暗黒武装鉄道結社シュバルツァークロイツ本社、総帥執務室の椅子に腰掛けたフラウ＝ラッテ総帥の前では、学園都市で行われている実験の成果を報告する女性の姿があった。

艶やかな黒髪のショートヘアーの彼女は、一見秘書の様にも見えるが、シュバルツァークロイツ防衛局の真つ赤な女性士官用制服を着てる事から、秘書では無いことが容易に想像できる。

彼女は、サラ＝オルコット35歳。

しかし、魔力で老化を停止させているため24歳位に見える。

因みに年増は禁句、元々はセントノア十字教会（シュバルツァークロイツと戦争を繰返してきた異世界の十字教勢力）の聖人（セントノア十字教会ではかつて魔王バフメド＝ラッテを倒した勇者達の末裔とされている）だったが、バフメド＝ラッテの息子であるフラウ＝ラッテに一目惚れし、侵攻を捨て暗黒武装鉄道結社シュバルツァークロイツの路線を防衛する防衛局の局長兼総元帥となる道を選んだ変わり者である。

しかし、彼女は異常なまでに総帥であるフラウを敬愛しており、部屋の壁を彼の写真（盗撮）で埋め尽くす等の奇行を除けば、フラウの忠実な下部といえる。

故にフラウは彼女を最も信頼しているのである。

「アレイスターも突飛な事を言い出すよね・・・まあ彼のプランの一環なんだろうけど、いまいち読めないのがシャクだね。」

「そう仰られるかと思い、既に情報部に分析を命じてあります。」

「わぁ♪さすがサラだ大好き♪」

フラウの天使の様な笑顔と大好き発言は、彼女の理性を容赦なくえぐる。

しかし彼女は、ポケットからハンカチを取り出し、鼻から流れ出る紅い忠誠心を塞き止め、何とか理性の崩壊を防いだ。

「そ・・・総帥・・・急用を思い出したので私はこれで・・・」

そして、ふらついた足取りで部屋を出ていった。

「どうしたんだろう・・・」

首を傾げるフラウ、だが原因であるその本人に自覚はまったくないようだ。

「うおおおお！（ゴンゴン）総帥に大好きって言われたあああ（ゴンゴン）」

その後、廊下には絶叫しながら顔面ドラムをするサラの姿があった。

「あ・・・あの・・・総元帥・・・「みいゝたあゝなあゝ」ひいひい

いい！見てません！！何も見てません！！！！」

それを心配して声をかけた不運な職員は、彼女に夜叉の様な形相で睨れ、慌てて逃げ出した。

学園都市

「第7学区」

「炎は車輪となりて凧ぎ払う、ラグスカノ（炎車輪）！！」

ラストイーがラグス（車輪）とカノ（炎）のルーン文字を描くと、灼熱の炎で作られた巨大な車輪が現れ、それは、黒子目掛けパンジヤードラムが如く突進する。

「くっ・・・発火能力者ですの？」

黒子はそれに反応して素早く演算を行い、ラストイーの直ぐ上にレポート、得意のドロップキックの体勢にはいる。

「氷の巨人は我を守護せん、スリサズイサ（氷巨人）」

ラストイーもそれに反応し、今度はスリサズ（巨人）とイサ（氷）のルーン文字を描く。

すると、彼女を守る様に地面から氷の巨人が出現し、ドロップキックをの体勢に入っていた黒子の足を掴み、壁に叩きつけた。

しかし黒子は、身体が壁に接触する前にレポートで脱出する。

「これは、いつたい・・・」

黒子が動揺するのは当然である。

なぜなら、通常ひとりが獲得できる能力は1つだけで、複数の能力を持つ多才能力マルチスキルは理論上不可能だからだ。

理由は、能力を得る為に必要な、自分だけの現実を複数持とうとすると、脳が過負荷で破壊されてしまうからである。

しかし、目の前の少女は発火系能力と水流操作系能力という系統の違う能力を当たり前の様に使用したのだ。

「ちょっと魔法ぶっ放しただけじゃない、何鳩が豆鉄砲食らった様な顔してんのよ。」

ラスティーの方もルーン文字そのものを使用した初步的な魔法を使用しただけでも関わらず、相手があり得ない程驚いた事に違和感を感じていた。

魔導具の存在、そして相手がテレポートしたことから、魔法技術の様なものは存在している筈、様々な系統の魔法を使いこなすのが当たり前の世界で産まれ育った彼女には、相手が驚く理由が全く解らなかった。

「ほむほむ・・・どうやらこの世界の技術体系は、リズ達のもとは違う様なのだ・・・」

相手の表面思考を読み取りながら様子を見ていたリズロットが、ラスティーの疑問に答える様に話す。

「自分だけの現実によって『こうなる筈だ！』って思い込む事で現実の法則を歪める・・・中々面白い技術なのだ♪」

彼女は楽しそうに、説明を続ける。

「ラスが使うルーン文字が持つ力で法則に干渉する魔法とは根本的に違うのだ。」

あと、新旧世代魔法と暗黒魔法は法則をコード化した法則文字ロウコードを使って法則そのものを一時的に改編するから自由度が高いつてラズが言つてた気がするのだ♪」

「・・・結局受け売りかい！」

「気にしたら負けなのだ♪」

最後のオチに思わずツツコミを入れるラスティーだが、リズロットはお約束の台詞で受け流し、死神の鎌デスサイズを構え、こう言い放った。

「・・・つて事でそっちに勝ち目は無いから、諦めてリズ達を逃がすのだ♪」

しかし、黒子は首を横に振る。

そして、

「それはできませんの・・・」

私は学区内の風紀を守る風紀委員ジャッジメント、勝ち目が無いからと言って、風紀を乱す者を見過ごす訳にはいきませんの！」

太股に忍ばせていた鉄矢をテレポートで飛ばす。

しかし、その鉄矢は何故かりズロットの手の中に・・・

「だから勝ち目が無いって言ったのだ・・・」

リズロットは指で鉄矢をグニヤリとねじ曲げながら邪悪な笑みを浮

かべる。

それを見た黒子は、背筋に嫌な汗が流れ落ちるのを感じた。

「さてと、そろそろ飽きてきたからお別れの時間なのだ・・・」

リズロットは、死神の鎌デスサイズを低い姿勢で構え・・・

そして次の瞬間、瞬間的に間合いを詰め、黒子の前に現れる。

黒子もテレポートで逃げようとしたが、テレポートの演算が終わる前に死神の鎌デスサイズの刃が一閃し土煙があがる。

土煙が晴れると、そこには身構え小さくなっている黒子の姿があった。

その前には大きく抉れた地面があり、リズロットの死神の鎌デスサイズは黒子ではなく、そこを切ったようだ。

そして、

「やーい、引っ掛かったのだゝバーカ、バーカゝ」

思いっきり相手を馬鹿にするリズロットの声が聞こえた。

「最後は本気でびびってたのだゝ」

「な・・・なにを！」

最後は本気でびびっていたらしく、黒子の顔は真っ赤になる。

「カッコ悪いのだ」

「お・・・お黙りなさい！」

更に、黒子をからかうリズロット・・・

「あんたも大概しとかなないと、何時か痛い目見るわよ・・・」

いつもの調子でふざけ半分に相手を小馬鹿にしつつ戦うリズロットの様子に呆れ気味にラストイーが忠告するが・・・

「リズは無敵だから平気なのだ」

・・・と、いつも通りその忠告を聞く気は無いようだ。

そして、こいつはバ神2連星の片割れだった事を思い出し、ため息をつく。

邪神なら戦う相手に恐怖を与えるべきなのだが、現在戦闘中だといふのに恐怖はおるか緊張感の欠片すら感じられない・・・

邪神を信仰する彼女としてはもう少し邪神らしくあって欲しい所だが、残念ながらそれは叶わぬ夢のようだ。

それはともかくとして、リズロットがこの戦いに飽きてしまった以上、戦闘はここで終わりだろう。

リズロットが相手を殺さなかったと言うことは、この場から逃走するつもりなのだろう。

ラストイーがそう考えていると、リズロットが隠していた悪魔の羽を開きバサリと軽く羽ばたかせる。

「な・・・あ・・・悪魔?!」

それを見た黒子は目を見開いた状態で固まった。

リズロットに続き、ラストイーも隠していた悪魔の羽を開く。
そして二人は、思考が完全に止まってしまっている黒子の前から飛び立っていった。

数分後・・・

「黒子！怪我は無い？」

「お・・・姉・・・様？」

突然連絡が途絶えた黒子を心配し、駆けつけた御坂 美琴が見たのは、呆然とした様子で虚空を見つめる白井 黒子の姿だった。

「何があつたの！黒子！！」

「悪魔・・・が・・・悪魔が！」

駆け寄った美琴に黒子が抱きついた。

「ちょ・・・黒子！」

いつも通り電撃で撃退しようとした美琴だったが、黒子の様子がおかしい事に気がつき、それを思い止まった。
なぜなら、何かに脅える様に彼女の身体が小刻みに震えていたのだから・・・

•
•
•
T
O
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第2話 「悪魔の羽」(後書き)

ホント正直すまんかった、暗黒武装鉄道結社シユバルツアークロイツの世界だと普通に変な種族や神様が登場するのです。今回もそんなノリでやった結果がこれだよ・・・悪魔の羽がトラウマにならない事を祈るばかりです。

第3話 「邪神と甘味」(前書き)

新キャラ2名追加のしました。

戦前の満州鉄道の広告動画みると、ホントに乗りたくなりますね、アジア号に・・・

アジア号は無理なので、6月に同じ色のトワイライトエクスプレスに乗りに行ってきます。

訂正、車輪配置4-8-8-4はホワイト型ではなくビッグボーイ型でした、これにより満州鉄道の型式名ホワロ型蒸気機関車はビッグロ型蒸気機関車になります。

第3話 「邪神と甘味」

ロンドン

「キングスクロス駅」

イギリス鉄道の主要ターミナル駅の一つ、キングスクロス駅。

しかし、まだ朝の5時を少し過ぎた頃であるせいか、人の姿はまばらである。

その9番線のホームと10番線のホームの間にある煉瓦の壁に見せ掛けた入口の先には、魔術サイドの者しか知らない隠されたホームが存在する。

そのホームの一つ9と3 / 4番線には、普段イギリス鉄道では見られない列車が止まっていた。

流線型のパシナ型蒸気機関車を大型化した様な動力ユニットを2基繋ぎあわせた全長42・0メートル、全高4・0メートル、全幅3・4メートルの巨大なビッグボーイ型蒸気機関車、ビッグロ型蒸気機関車に牽引された武装した対空機銃の付いた旧型客車の様な車輛に3連装砲塔の付いた装甲の様な車輛が混ざった編成で、黒地に赤帯という色で統一された車体にはレールの断面にMという満州鉄道のマークが刻印されている。

更に車体側面には「ケヒ（警備車）2593」や「ケヒネ（警備寝台車）3246」等、満州鉄道で使用されている車号があり、イギリス鉄道では使用されていない列車である事が一目でわかる。

この列車は、「暗黒武装鉄道結社シュバルツァークロイツ」防衛局第03列車総隊の旗車フラッグトレインを勤める軽戦闘列車「ヴェファリア?号」である。

「宗教は平和ではなく戦争をもたらす・・・何故なら、宗教とは戦争の道具でしかないからだ・・・権力者にとっては・・・」

列車の最後尾の展望車にはウィンググラスを片手にたたずむひとりのタキシードに身を包んだ男が姿があった。

白髪にシルクハットそしてオペラ座の怪人の様な怪人マスクで顔を隠したその姿は、今にも探偵とおいかけてを始めそうな怪しい格好である。

しかし彼は、シュバルツァークロイツ防衛局第3列車総隊司令官のダークキッド元帥である。

彼は、先刻までイギリス国内のシュバルツァークロイツに協力する魔術結社のトップが集まる会合に出席し、今から学園都市に到着するまでの間のプライベートタイムを楽しむ予定である。

しかし・・・

「痛元帥閣下、こんな所に引き込もっておられましたか。」

ダーク元帥が声のした方をみると、メイド服の様な第3列車総隊の女性用制服を着た栗色の瞳に同色の長い髪を三つ編みにした、18歳くらいの片眼鏡を掛けた少女が、ワインに合わせた軽食をのせたお皿を持って立っていた。

「全く、朝から酒浸りとは・・・私は貴族だアピールのつもりですか？」

「・・・私は夢魔、基本的に夜行性ですから・・・」

「なるほど、夜の猛獣・・・正に変態の極み」

「ちょw、ローザさん今日の毒舌はいつになく強烈なんですけど・・・」

「

「お褒めに預かり光栄です。」

彼女は第3列車総隊副司令官兼ダーク元帥の専属メイドであるローザ・マリエンヌ中將である。

先程からの会話でわかる様に、彼女はダーク元帥を痛元帥閣下と呼び、彼に強烈な毒舌攻撃を仕掛ける常習犯である。

しかも、それが彼女の愛情表現なのだから、女性第一主義のフェミニストであるダーク元帥にとってはなおさら質が悪い。

「それより痛元帥閣下、^{アイクビショップ}最大主教はセントノア十字教会の申し出を蹴る方向で動き始めたそうです。」

「イギリス清教とて、政治が絡めばただの組織でしかない・・・上層部の連中の利益と逃げ道を確保すれば容易に崩せる・・・総帥らしいやり方だな。」

イギリス国内では、ナショナルレールを中心とした鉄道各社が魔術結社を取り込みつつ巨大な独立勢力「鉄道魔術連合」をつくる動きが活発化していた。

当然その背後では暗黒武装鉄道結社シュバルツァークロイツ総帥フラウ・ラッテが糸を引いていて、イギリス清教を国内問題点で一杯の状況に追い込み、戦争遂行能力を奪う事が目的である。

そして、イギリス国内は、イギリス清教と鉄道魔術連合の対立が激化しつつ内戦が始まってもおかしくない状態であった。

そんな状況で、セントノア十字教会の申し出を受け入れられる訳も無く、^{アイクビショップ}最大主教の動きは当然の結果ともいえる。

カラン、カラン、カラン・・・

鼓笛隊の様に派手な制服を着たヴェファリア？号の乗務員が、大きな手持ちのベルを鳴らし発車を知らせる。

「ヴェファリア？号、間もなく発車でーす！
乗務員は速やかに乗車してくださいーい！！」

ベルを鳴らししていた乗務員は、ドアをひとつづつ閉めながら、乗り遅れた乗務員が居ないか確認していく。

そして、全てのドアが閉められると、「ピッピッピッピイイイッ」その乗務員は独特のリズムで笛を吹き、機関手に発車準備完了の合図を送る。

その合図を受け、ビグロ型蒸気機関車は、「ビョオオオン」という京阪電車によく似た音の電笛を鳴らし、周囲に列車が動き出すことを知らせる。

蒸気機関車なら汽笛だろうと思うかもしれないが、ビグロ型蒸気機関車は汽笛と電笛そして信号ラッパの代わりのミュージックホーンを搭載していて、騒音対策のため、市街地では電笛を使用する事が多いのだ。

それはさておき、ガチャリという重々しい音と共に、ヴェファリア？号はゆっくりと動き始めた。

「さて、彼等には我々の様に数百年に渡る戦争を続ける度胸があるのか・・・」

ゆっくりと流れ始めた景色を眺めながらダーク元帥は呟いた。

「第7学区」

「ブラックホール・・・」

呆れた顔で呆然と目の前の光景を見守る守崎 神奈、その目の前には膨大な量のスイーツで埋め尽くされたテーブルがあり、その量たるや、2人いや、4、5人でも全て食べきる事は不可能な程の量のであるが、それを平然とかつ順調に消化していくラズロット「ファルの姿があつた。

リアル鬼ごつこの末、ゲラン駅長を冷凍ガエルにしたラズロットは、部屋に引き込もっていた神奈を無理矢理連れ出し、街に繰り出した。そして、美味しそうなスイーツを出しているオープンカフェ店を見つけた彼女は、そこでお昼のおやつを食べているのである。そう、この胸焼け所か、一発で生活習慣病にかかりかねない量のスイーツは彼女のおやつなのである。

一体彼女の胃袋がどうなっているのかが、本気で気になる神奈だった。

「そいえば、リズは何処行ったか知らないですか？」

「ラズが、リアル鬼ごつこしてる最中に遊びにかけた・・・行き先は知らない。」

今更なラズロットの質問に、神奈はケーキを崩しながら答える。

「神奈たんさつきから全然食べてないのです！」

「既に5個目・・・もう無理・・・」

「遠慮しちゃ駄目なのです!」

「遠慮の基準が解らない・・・」

既に限界を迎えている神奈だったが、ラズロットはそれに気付かず更にスイーツを薦める。

心が読める筈なのに、何故と思いながらも神奈はひきつった笑顔で手元のケーキを詰め込む。

その時、ラズロットの後ろで「パタン」という何かが落ちる様な音がした。

ラズロットが振り返ると、腰を抜かしたツインテールの少女が、ラズロットを指差し震えていた。

彼女は先程ラズロット達と戦っていた白井 黒子で、ラズロットをリズロットと間違えているのだが、そんな事情を知る筈もないラズロットは首を傾げた。

「どうしたの黒子!」

突然腰を抜かした黒子の元に、美琴が慌てて駆け寄る。

「あ・・・悪魔が・・・さっきの悪魔が居ましたの!」

「な・・・」

脅える黒子に事情を聞いた美琴は、ラズロットを睨んだ。

「ほえ?」

事情が全く解らないラズロットは、更に首を傾げる。
そして、

「ねえねえ神奈たん、この人達会ったことあったですか？」

「記憶にない・・・初対面のはず・・・」

神奈にも尋ねてみたが、やはり初対面の様だ。

「アンタ達、黒子に何をした！」

返答次第じゃタダじゃおかないわよ！」

「そう言われても、初対面だから返答しようが無いのです・・・」

美琴が強い口調で迫るが、ラズロットはそれを気にする様子も無く、
首を横にふる。

「ふざけんなこるああ！！」

やはり、導火線の短い美琴は怒りに任せラズロットに電撃を放つ。
しかし電撃は、ラズロットの右手に吸い寄せられ、球状に硬められ
てしまい何の被害も与えられなかった。

勿論ラズロットは椅子に座ったままである。

「ラズ、周りが迷惑・・・場所を考える・・・」

「むううう、悪いのはその妖怪電気女なのです・・・」

何故かラズロットに苦情を言う神奈にラズロットは、両方の頬を目

一杯膨らませ抗議するが、神奈は特に気にする様子も無く紅茶を飲んでる。

ラズロットもこれ以上は無断だと思ったのか、手のなかの電気の塊を握り潰すと、近くで啞然としている店員を呼び、追加のジュースを注文する。

既に美琴達は眼中に無く自分のグラスが空になっている事の方が重要なようだ・・・

「無視すんなやゴルアアア！」

完全にブチ切れた美琴は、更に出力を上げた電撃を放つが、ラズロットは先程と同じく右手に電撃を吸い寄せながら、店員かた新しいジュース入りのグラスを受け取っている。

「いい加減自重するべき・・・」

「だから、悪いのは妖怪電気女なのです！！」

「誰が電気女じゃゴルアアア！！！」

更に出力アップした電撃を放つ美琴だが、結果は同じであった。

「だから、迷惑・・・」

「そんなに迷惑なら、神奈がアレ倒せば良いのです！」

「それは名案・・・ちょうど食べ過ぎで運動したかったところ・・・」

神奈はゆっくりと立ち上がり、美琴の元に歩み寄る。

「な・・・何よ・・・」

無表情の神奈に少し後ずさる美琴・・・そして神奈は、

「ここは迷惑になる・・・場所を変える事を提案・・・」

「場所はラズが、用意するから安心するのです」

「それなら問題ない・・・」

被害を抑える為に場所を変える事を提案したが、ラズロットが場所を用意する事を提案したので、それを受け入れた。

それを受けて、ラズロットが両手を上にかざすと、周囲が色の無い白黒の空間となり、ラズロット、神奈、美琴、黒子以外の全てが凍り付いた様に動かなくなってしまった。

「い・・・一体何をしたの・・・」

「ラズが被害を出さない様に空間を隔離固定しただけ・・・害は無い・・・」

あまりの出来事に啞然とする美琴に対し、神奈は説明をしつつ右耳の魔剣「ゾディーク」の魔力システムを起動させ、イアリングの形から巨大な剣の形にする。

その時、美琴と神奈の間に黒子が割って入る。

「お姉さま！もう止めてくださいですのー!!」

黒子が両手を拡げて美琴が戦うのを阻止しようとしたが、美琴はそれを聞く様子は無い。

「退きなさい黒子。」

「いいえ、退きませんの！」

このままでは、お姉さまが!!」

しかし、何とか食い止めようと美琴に食い下がる。

さっきの多才能力と悪魔の羽そして、この謎の空間。
マルチスキル

どう考えても普通では無い、いや人間とは到底思えない・・・

そんな相手に戦いを挑めば大怪我どころかいつ殺されてもおかしくない。

相手は不良とはいえ、人を平然と殺そうとした、躊躇などしないだろう・・・

「お姉さま!!」

「邪魔・・・真つ二つにされなくなかったら下がるのが賢明・・・」

「ひっ・・・」

神奈は魔剣「ゾディーク」の切っ先を黒子に向け、

「腕一本位で済ませる・・・心配ない・・・迷惑の代償で命までは取らない・・・安心していい・・・」

と、安心するように説明した（本人はそのつもり）が、全く安心できる内容では無く、むしろ危機感を覚える内容である。

「随分と余裕ぶっこいてるみたいけど・・・」

美琴は黒子を庇う様に前に出る・・・
そして、

「第3位の力、甘くみないで!!!」

電磁誘導で加速した蹴りを放つ・・・が、神奈はそれを魔剣「ゾデ
イク」の腹で軽々と受け止めこっぴどい。

「敵対行動・・・正当防衛成立・・・」

・・・To be continued

第3話 「邪神と甘味」(後書き)

何でしょうか、どうもとあるシリーズらしくない独特の雰囲気が抜けませんね。

やはり、もつと原作キャラを活躍させないと、オリキャラの強烈過ぎる個性に負けて空気になってしまいますね。

・・・というわけで、次回は暴走災害魔法剣士の守崎 神奈と超電磁砲の御坂 美琴の戦闘を中心にしてみます。

第4話 「戦場のお茶会」(前書き)

黒子はもしかして振り回され属性をもっているのでは・・・
個人的には黒子さんはお気に入りキャラなので、双子達と絡ませて
遊びたいと考えてます。

P S : 感想ぐださいいいい (TOT) / 「必死」

第4話 「戦場のお茶会」

学園都市

「隔離固定空間」

色の無いモノクロの空間・・・

そこには、学園都市の第7学区の街並み・・・

しかしそこは、音も無く、動く物もない・・・命の無い仮染めの世界・・・

そんな世界を舞台に、守崎 神奈と御坂 美琴は激しい戦闘を繰り広げていた。

「捕捉・・・強化35%・・・粉碎・・・」

ブツブツと何かを呟きながら、魔剣「ゾディーク」の巨大な刀身を振り抜く神奈。

しかし、美琴は磁場で形成したシールドで、それを受け流し軌道を巧みにずらす。

軌道を逸らされた刀身はとてつもない速度で空間を切り、その際に発生した衝撃波が後ろのビルを粉碎する。

（強化系能力者？それなら・・・）

美琴は、電磁誘導で後ろに加速し距離をとり、強力な電撃を放った。相手が強化系能力者ならば、距離をとって戦えば、その能力を発揮させず倒す事がきる。

放たれた電撃は神奈を黒焦げにする・・・はずであった・・・

「術式関数？エナジーシールド？ローディング・・・デフォルト起動・・・」

しかし、神奈が何かを呟き、魔剣「ゾディーク」を突き出す様に構えると、その刀身から魔方陣の様なシールドが展開し、電撃を防ぎ無効化してしまった。

「な・・・なんで・・・」

ラズロットに続き、神奈にまで能力を防がれ、呆然とする美琴・・・そんな彼女に、神奈は自分の持つ魔剣「ゾディーク」を見せ付ける様に構える。

「ゾディークは万能・・・死角はあんまり無い・・・」

「・・・あんまりって事は、死角・・・つまり弱点があるって事ね！」

「・・・お前・・・キライ・・・」

自分は死角が無く強いと言いたかった様だが、死角は無いと言い切らない事で、死角があることを露見してしまう当たりは、彼女の愛嬌である。

ちなみに彼女は、元々自身自身に自信が持てない要領の悪いドジっ娘だったが、魔剣「ゾディーク」を受け取り強大な力を入れた途端に性格が豹変したという残念な娘でもある。

ただ、相手を威圧するつもりが、自分に弱点がある事をばらしてしまっドジっぷりは、未だにドジっ娘属性が健在である証であろう。

「このチョコレートケーキは、カルーアに合いそうなのです。」

激しい戦闘を繰り広げる神奈と美琴を余所に、ラズロットは再びテーブル上のスイーツの消化作業を再開していた。

どうやら、テーブル上のスイーツだけ意図的に隔離固定空間に取り込んでいたようだ。

「貴女は、この状況で一体・・・」

「神奈さんは適当に手を抜いてるから、心配する必要は無いのです♪
それより・・・」

ラズロットのマイペース振りに、呆れる黒子、だが彼女はそれを気にする様子はない。

そして、黒子が美琴の事を心配している様なので、神奈が本気で彼女を傷付けるつもりでは無い事を告げ、別の話題に話を変える。

「色々と聞きたいことがあるのでは無いのですか？」

魔導具・・・マジックツールについてとか・・・」

黒子の心を読み取ったラズロットが、マジックツール魔導具の話題を振ると、黒子は身構え警戒する。

「危害を加える気は無いのです。」

暇だから、お話したいだけなのです♪」

「いきなり鎌で斬り付けてきた相手は、信用できませんの・・・」

向かいの席に座るように促すラズロットだが、彼女をラズロットだ
と思っっている黒子は警戒を緩める様子はない・・・しかし、先程と
はまるで別人の様な対応の変化に違和感を感じる。

「双子って見たことあるですか？」

「何を突然・・・はっ！貴女は・・・」

「正解なのです」

ラズにはラズロットという双子の片割れが居るのです」

違和感の原因に気付きハツとする黒子の様子を見て、ラズロットは
嬉しそうにはしゃいでいる。

ラズロットは、人を驚かせたり、困惑させたりするのが好きでな
のである。

「それじゃあ、まずこれを見るのです」

「なんですの？この透明な板は・・・」

ラズロットが机の上に置いた、透明で複雑な模様が描かれた、縦横
10cmの薄い板を覗き込み、黒子が尋ねる。

「通常版の魔導具の本体で使用されている魔力回路基板なのです。
これを武器に埋め込み、術式関数を読み込ませ力を使用するのが、
いま神奈が使ってる新世代魔法なのです」

「まどつぐ？^{マジックツール}魔導具とは違うのですか？」

黒子の質問に応える様に、ラズロットはもう一枚の魔力回路基板を

机に置いた。

模様も全く同じだが、よく見ると所々違う部分が確認できる。

「こつちが、学園都市への輸外型、魔導具用の魔力回路基板なので
す。マジックツール

術式関数読み込み用の部品が違うのと、外部演算回路にリミッター
が付けられている点が大きな違いなのです。」

「つまり、どういう事なんですか？」

2枚の魔力回路基板の部品の異なる場所をを指で指し示しながら、
それぞれの違いを楽しそうに説明していくラズロットだったが、余
りにもマニアックな内容に苛立ち、簡潔に結論を述べるよう促す黒
子……

しかし、KYで定評のあるラズロットはそれを気にする様子は全く
なく、さらにディープな内容に話は進む……

「通常魔導具用基板の術式関数読み込の部分マジックツールを、輸外型魔導具では、
使用者らの演算要求を受付、代行演算するだけの機能に簡略化され
ているのです。」

そのため、多種多様な術式関数を読み込み複数の系統の魔法が使用
できる通常魔導具とは異なり、輸外型魔導具は術者そのものが関数
となる様な概念になるのです。」

それに関連して、術式関数のダウンロードの必要も無いので、ネッ
トワークモードも削られているのです……ダウンロード

あと、中の制御を担当する原始文字の組み方が子一時間説教したい
くらい酷いのです……間違いだらけで下手をすると使用者の脳を
破壊したり、力を暴走させて無差別破壊をしたりする危険があるで
すね……。」

楽しそうに長々と説明を続けるラズロツト、それを呆れた表情で聞いていた黒子だったが最後の言葉で表情が凍りついた。

「ちょ！最後の部分だけ詳しくおしえてくださいの！」

能力の暴走や脳の破壊などの危険が伴うと聞けば当然の反応だろう。このまま放置すれば、過去の幻想御手とは比較にならない被害が出る事は誰でも容易に想像できる。

責任感がひとしばい強い黒子がそれに食い付くのは当たり前である。

「知りたいのは、今出回ってる魔導具マジックツールを何とかする方法・・・強いというなら、遠隔操作でその機能を停止させる方法ってところか？」

巨大なパフェのタワーを切り崩しながらだが、的確に黒子が知りたい部分突いて来るラズロツト。

しかし、一番重要な部分は未だ言わない。

おそらく意図的にそうして、黒子が苛立つ様を観て楽しんでいるのだろう。

全くもって性格が悪い・・・

「まったく・・・心を読んでるとはいえ、的確に核心を突いて来ますわね・・・なおかつ、肝心な部分はあえて伏せる・・・陰湿にも程があるありますわよ。」

「陰湿とは失礼なのです！イタズラ好きと言っのです！」

黒子の陰湿発言に頬を膨らませて怒りを表現するラズロツトだが、口の周りが生クリームだらけの顔では、全てが台無しである。

そして黒子は、大きな溜め息と共に、ラズロットの前の席に腰を降ろした。

終始緊張感の無い相手に緊張感全開の臨戦態勢の自分が馬鹿らしくなったのだろう。

黒子は、気紛れなラズロットが魔導具^{マジックツール}を止める方法を話すまで、彼女の雑談に気長に付き合う事にしたようだ。

「それでは、魔導具の原理からなのです」

「はぁ・・・不幸・・・ですわ・・・（はっ！何でわたくしがあの類人猿の口癖を・・・）」

自己嫌悪に陥り、机に顔面ドラムをする黒子。

その前では楽しそうに魔導具についての講義をするラズロット。

その周囲で激しい戦闘を繰り広げる美琴と神奈。

このシール過ぎるどうしてこうなった的な状況は、美琴と神奈の戦闘が終わるまで続くのであった・・・

・・・To be continued

第4話 「戦場のお茶会」 (後書き)

家の子達ってみんなマイペースですね♪

でもマイペースで頭のネジが二、三本外れちゃってるぶっ飛んだ行動とかが家の子達の魅力になってると信じてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9599s/>

とある双子の邪神様（Evil God）

2011年10月7日18時09分発行